

# Fate/Zero ———in Evolution

よこちよ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて地球上で暗躍し、その破壊を目論んだ悪の存在「エボルト」。彼は自分自身が作り上げた正義の味方である「仮面ライダー」に敗北し、新世界を創造するためのエネルギーとなって消えた——ハズだった。

彼はいかなる理由を持ってか平行世界上へと顕れ、再び暗躍を開始しようとしていた。

これは、本来ならばいるはずのない存在が介入した第四次聖杯戦争の話。

この物語は、彼の暗躍によってどう変化していくのか。

冬木の盤上は今傾き、転がり始める——！

この作品は、「仮面ライダービルド」の悪役、「エボルト」と「Fate/Zero」の第四次聖杯戦争のクロスオーバーです。あまり……というか殆ど見たことがないクロスなのですが、見ていただけると幸いです。

# 目次

地球外生命体のRestart	1
バーサーカーの目標へターゲット	4
戦闘前のMeeting	11
集いし5人のServant	16

## 地球外生命体の Restart

日本にある冬木市。

別段他の街と変わった名所があるわけでもなく、どこにでもある普通の街。普通に生活する分には別に大したことも無い、平凡な街だ。

——そう。普通に生活する分には、だ。

この街には、ある秘密がある。しかも、普通じゃ考えられないようなのがな。

その名も、「聖杯戦争」。魔術師同士の殺し合い。

過去に名を上げた聖人や戦士、作家、はたまた物語の英雄までを術式を通して「マスター」が呼び出し、「サーヴァント」としてこの世に現界させ、そいつら同士が戦う上、魔術師同士が殺し合う。そして、生き残った最後の1人だけが万能の願望器である「聖杯」を手に入れ、どんな願いでも叶えることが出来る………といった儀式が行われる。

この儀式は俺——「間桐雁夜」が籍を置いている「間桐家

」、「アインツベルン家」、そして「遠坂家」の三家が協力して作り上げたものらしい。最も、それは200年以上前の話らしいがな。

そして、「始まりの御三家」と呼ばれる内の一角である間桐家、その子供であるこの俺もそのマスターの権限を持っている人の1人であった。

「さて、準備はいいかのう？ 雁夜。」

その雁夜の前で笑ういけ好かなくも不気味な老人、「間桐臓硯」。

俺の祖父でもある彼はこの家の主でもあり、何百年もの間生き続けている、いわば狂人であった。生にしがみつくその妄執は凄まじく、こうして目の前に立っているだけでも足が竦む。

俺はそんな男を前にし、突貫工事で鍛えた魔術師の身体をフラフラしながらもなんとか立たせていた。

「ああ。いつでもできるさ。」

俺は今から、「バーサーカー」のクラスのサーヴァントを召喚しようとしている。

今は強がってはいるが、正直言うと今でもキツイ。今からサーヴァ

ントを呼ぶとなれば、最悪気絶する可能性だってある。

しかも俺自身に魔力は少ない分、戦うにはサーヴァントに「狂化」を付与して強化し、無理やりにも戦力を上げておかないといけないという苦肉の策であった。そのせいで余計に魔力を食われる。この聖杯戦争中持つてくれるといいんだが……。無論、そこには臓硯の自虐的な趣味も含まれていることも見抜いてはいるがな。

クソっ、忌々しいやつだ！

「では、召喚するといい。貴様のサーヴァントをな。」

ニヤニヤと笑いながら後ろへ下がる臓硯を後目に、目の前に敷設された魔法陣の前に立つ。

そして、サーヴァントを召喚するための文言を唱え始めた。

左手を前に出し、魔法陣へと手をかざす。

それに応じて令呪が輝き、俺の身体から少くない魔力が持つていかれる。それを補おうと体内の刻印虫が血肉を喰らい、暴れる。

血を吐き、霞む目を必死に開き、文言を唱え続ける。

魔力が回り、魔法陣は廻る。

バチバチと紫電が爆ぜ、薄暗い蟲蔵をいつそ神秘的なまでに照らし続ける。

そして、魔法陣に集まっていた魔力がある時を境に形を造り、人の形を取った。

「おお………これは………！」

後ろの臓硯も思わず声を上げているが、正直殆ど耳に入っていない。

薄ぼんやりとした視線の先には、さつき現界したばかりの人型が蠢いていた。

ここで、少し別の話をしよう。

本来の世界線に置いて、彼が召喚するはずだったバーサーカーは、「ランスロット」。

円卓の騎士に名を連ねる剣士の1人であり、その冴え渡るような剣技は、他を圧倒するほどの凄腕であった。

そして、此度の召喚でも無事に召喚される――  
――はずであった。  
これが正しい歴史であれば。

「ふう……やれやれ。ようやく満足に動けるようになったな……」

魔法陣から現れた人型は、円卓の騎士とかそういった高尚な類のものではなかった。

真っ白なシャツにベージュ色の上着。柔らかな印象を与えるソフトハットに、オシャレなサングラス。脇に不思議な箱を抱えた上、どこからともなくコーヒーマシンの香りを思わせるその男は……どうみても一般人だった。

しかも、狂化されているはずなのに言語を喋る所からして、そもそもバーサーカーすらも怪しかった。よもや失敗か……？

そうも思ったが。だが、その佇まいは歴戦の戦士のそれであり、いくつもの戦いを経たことは容易に想像出来る風格を持っていた。

そして、その何もかもが怪しい男は、ゆっくりと周りを見渡し、ふわっと人の良さそうな笑顔を顔に貼り付け、流暢に自己紹介を始めた。

「Bonjour!お二人さん。俺の名前は『石動惣一』ってんだ。よろしく頼むぜ?マスター!」

彼の名は、「石動惣一」。

かつて別の世界において暗躍し、地球を破壊しようと目論んだ悪の存在であった。

「よろしく頼むぜ?ホントによお。」

そしてサングラスを上にあげ、高らかに笑いあげた。

## バーサーカーの目標へターゲット

「よろしく頼むぜ？マスター！」

目の前の男——「石動惣一」は片手をあげ、気さくに挨拶をしている。

そのフランクな様子は、今からの聖杯戦争を勝ち抜こうと意気込み、必死にやってきた自分を否定されたような感覚を与え、雁夜神経を逆撫でした。

「お前っ……………」

その激情に身を流され、胸ぐらを掴む。

雁夜の心中にはこれからの戦いにおける不安やサーヴァントに対しての不満、そしてなにより焦りが緋い交ぜになっていた。

「ちよ、悪かった。悪かったから！とりあえず手え離してくれよ！せっかくの一張羅がシワになっちまうだろうが！」

対する石動はその剣幕をサラリと受け流し、その上で上着の心配までする始末。

さして応えた様子もなく、シワになりかけたシャツを必死に整えている姿に毒気を抜かれた雁夜は、疲れがどっと押し寄せ、その場へたり込む。

「……………はあ。最悪だ……………」

自分の魔力もなく、魔術も貧弱。おまけに扱うサーヴァントは最底辺という始末だ。

今までの苦労が倍になって一気に来たような感覚に陥った気がし、これから先を危ぶんでいた。

「ったく。そんな顔すんなって、マスター。これからの方針でも話すとしようぜ？」

「お前が原因なんだよ……………」

早くも胃のあたりがキリキリと嫌な痛みが上がる雁夜は、蟲蔵を出る。後ろを追従する石動は物珍しそうな様子で辺りをキョロキョロと見渡しているが、特に面白いものもなかったのかいつの間にか普通の様子に戻っていた。

臓硯は興味を無くしたのか、いつの間にか闇へと消えていた。

「で、だ。お前の真名は把握してるんだが……そのほかのことを教えてくれ。でないとな戦略の立てようが無い。」

「……先に言っておくべきことがある。」

雁夜は自室へと移動し、戦力の把握を始める。

しかし、深刻そうな表情をした石動の口から出た言葉は――  
謝罪だった。

「……スマン！実は俺、ちゃんとしたサーヴァントじゃないんだよ！」

「……はい？」

思わず聞き返す雁夜。

「ちゃんとしたサーヴァントじゃ……ない？」

「ああ。正確に言えば、サーヴァントではあるんだが……半分召喚に成功してないんだよなあ。」

「どういうことだよ」

「要は疑似サーヴァントみたいなもんだ。俺は生まれが近代だからよ。ちよつとばっかし霊基が弱いんだよなあ……んで、ちよいとばっかし弱体化してるってわけ。」

サーヴァントの弱体化。

更に告げられた最悪の宣告に、思わず頭を抱えた。

「安心しろって。そこは俺の生前の経験でなんとかするさ。」

「お前の生前って、なにやってたんだよ。」

「驚くなよ？……実は俺、宇宙人で地球侵略に来てたんだよ！」

「はあ!?それ本当かよ!？」

「いや、嘘だ。」



「嘘かよ。」

「本当はカフエのマスターだ。」

「余計にダメじゃないか……………」

先程から話の主導権を握られっぱなしの雁夜を見て、大声で笑う石動。

雁夜の肩をポンポンと叩きながら、慰めるように撫でる。

「まあそんなにガツカリするなって。これでも俺、強いんだぞ?」

「……………信用できねえな。」

「おいおい!そんなこと言われたら俺がウルつときちまうだろうが。俺泣いちゃうぜ?」

サングラスを外し、目を抑えてあからさまな泣き真似をする。

その様子をうつとおしそうに見て、いつそ令呪でも使って黙らせようかとも一瞬考えてしまうが、思考を振り払う。

そして次の質問を投げかけようとした瞬間、石動の方から質問をしてきた。

「なあマスター。先に聞いておきたいんだがよ。お前が聖杯に懸ける望みって……………なんだ?」

ドキリ、と心臓が跳ねる。

自身が聖杯に懸ける願い。

雁夜は、この間桐家に養子に出され、今もなお蟲蔵で魔術師としての辛い調教を受けている桜を解放する為に聖杯戦争に参加している。

例えば、自分自身が願おうなどとは一切考えておらず、ただ聖杯を求めて戦いに挑もうとしていた。

「俺には……………望みはない。」

そう、言うしかなかった。

魔術を嫌い、家を飛び出し、逃げ出した自分。

そしてその挙句に自分の想い人とその子供のために戻り、自らを嫌いな魔術の道へと墮とした馬鹿な男。

自らをそう考える雁夜にとって、願いなどは最初からあるものではなかったのだ。

「……………ひとつ忠告しとくぞ?マスター。」

その様子を見た石動は目を細め、険しい表情になる。

「願いつか信念とか。そういうのがない人間は………目標を達成することは出来ない。」

「俺が過去に見た人間の中で成功したヤツらは、総じて『夢』とか『希望』とかを持つていた。逆に、半端な覚悟とか信念とかの状態じゃ絶対に成功はしない。これは俺の経験則だ。先人の言うことはよく聞いとけよ?」

石動が語る『信念』。

それは一体何をさしているのか………雁夜にはわからない。

だがこの言葉の重みは、確かに時代を生き、死んでいった者のそれであった。

その『格』の違いに、否応もなく目の前の存在が確かに『英霊』であることを自覚させられる。

思わず背筋が伸びた。

そして、自然と口からこぼれた言葉。

「お前の……お前の望みはなんなんだ?」

それは、目の前の存在が持つ『信念』。

自分には無いそれを持つ石動に、聞かすにはいられなかったその言葉は、石動に届く。

そして、答えが返ってきた。

「俺のの望み、か………。笑わないで聞いてくれよ?」

ぐぐくりと唾を飲む雁夜。

勿体ぶるように間を開けた石動は頭を掻き、恥ずかしそうにこう答えた。

「もう一度会いたいんだよ。俺が生前に出会った『正義の味方』に。」

それは、少年が持つような夢。

あまりにも純粹すぎて、あまりにもギャップがあつたその答えに、思わず吹き出す。

「オイオイオイオイ!笑わないでくれって言っただろ!くっそ、誤魔化しときゃよかったぜ!」

「いや、だって……いい歳した男が、正義の味方って……!」

「あーもう、いいだろ別に！そんだけ思い入れがあんだよ。『アイツ』には。」

ひとしきり笑い終えた雁夜は、心の中に光が灯ったような気がしていた。

目の前のコイツだってこんな純粋な夢を持つてるんだ。だったら俺だって。

俺だって願いを持ってもいいんじゃないかな？

そう思える程には心に余裕ができていた。

そして、そう思えるようになった頃には自分の引き当てたサーヴァントがとてつもなく頼もしく見えていた。

「改めて名乗らせてもらおう。俺の名は間桐雁夜。俺は——俺の救いたい人を救ってみせる！」

「おお！いいねえ。その意気だぜ？やっぱ人間はこうでなくつちなア！では俺も改めて。サーヴァント、バーサーカー。石動惣一だ。よろしく頼むぜ？マスター。いや、雁夜！」

「ああ。こっちこそー！」

がっしりと握手を交わす2人。

そこには時代や生死の差はあれど、確かに結ばれた手があった。

今ここに、バーサーカー陣営が完成したのであった。

その夜。

誰もが寝静まっているであろう時間帯。

バーサーカーである石動惣一。

否、エボルトは間桐邸の屋根の上に座り、1人星を眺めていた。

「間桐雁夜、か。なかなか面白い男じゃないか。」

片手に『変身煙銃・トランスチームガン』を弄びながら、独り言を呟く。

鈍色に光を受け止めるトランスチームガンはどこまでも暗く、まるでブラックホールのように光を吸い込む。

「ハザードレベルは2. 1. まだまだ弱いが……………あの時は2. 3. 中々に見込みがあるじゃないか。」

彼がハザードレベルを測ったのは2回。

最初に肩を触った時と、最後の握手。

雁夜は最初ハザードレベルが低かったが、自分の信念、つまり、『感情』によってハザードレベルが上昇していることになる。

「俺の半身である万丈ほどじゃあねえが……………。しかし、この『身体』も難儀なもんだなア。」

自分の胸に手を当てながらごちる。

(俺の今のハザードレベルは4. 5. か……………。ちつ、随分と減っちゃまったなあ。)

「ま、暫くはブラッドスタークで充分だな。」

ニヤリと嫌な笑みを浮かべ、トランスチームガンをしまおう。そして変わりに体内から1本のボトルを、思い出したように取り出した。

「そうそう。お前にも礼を言つとかなきゃ行けねえなア。『バーサーカー』さんよオ?」

持ったボトルに刻まれた模様は、正に『狂戦士』。

獣のような風貌に、屈強な腕を持ったレリーフの象られたボトルには今にも溢れそうな程エネルギーが詰まっております、溢れんばかりだ。

それを握りつぶすようにして取り込んだエボルトは勢いを付けて立ち上がり、背伸びをする。

「さあて。身体もあるし……………いっちょ奪ってやりますか! 聖杯とや

らをなア。」

「……………待ってるよ？ 『桐生戦兎』。また、お前らと遊べる日を楽しみにしてるぜ？」

降り立った蛇は、昏く笑い、今は会えぬ『正義の味方』へと再会を誓った。

## 戦闘前の Meeting

「遠坂時臣に言峰綺礼、衛宮切嗣にウェイバー・ベルベット、か。色んなマスターが居るもんだねえ。」

時は夜。

コーヒーをすすり、のんびりとくつろぎながらレポートのような紙を見ているのは、バーサーカーの石動。

その紙には、臓硯から提供された現在わかるだけのマスターの情報が書かれていた。

経歴を見ると、これでこそ聖杯戦争と言うべきか。一般人からすると全く馴染みのない仕事ばかりが並んでおり、石動の心を踊らせた。最も、彼が関心を寄せているのはその職業の特異性ではない。

(こいつらのハザードレベルはどれくらいなのか。そいつを調べてみたいもんだがねえ……………)

関心事項は、「ハザードレベル」。

彼がいくら星々を渡り破壊してきたブラッド族であっても、「魔術師」という存在とはついで出会うことは無かった。故に彼は魔術師のハザードレベルに対し、かなりの興味を示しているのだ。

「……………マスターは魔術師というかほぼ一般人だしなあ。」

「悪かったな。こんなへつぽこなマスターで。」

「あ、聞こえてた？すまんすまん。別に悪い意味じゃねえよ。」

どうやらいつの間にか声に出していたらしく、若干不機嫌そうになった雁夜。

「そんなことより、戦況が動いたぞ。アサシンが殺られた。」

手をあげて謝ると、少し機嫌を取り戻したのか、使い魔に監視させていた情報を共有した。

「……………なんだと？」

だがそれは、一番予想外の出来事だった。

アサシンは、その名の通り「暗殺者」のクラス。気配遮断スキルを持っており、襲われるまでその存在に気が付かないこともある。故にマスター自身が一番警戒すべき存在だったのだが——雁夜曰く、脱

落したらしい。

「それ本当か？」

「ああ、間違いない。あんなに派手に剣やら斧やらを叩きつけられてたんだ。あれで死んでなきやそれはもうサーヴァントの枠組みを超えてるよ。」

「なるほどねえ……………」

「どうやら相当派手にやられたらしい。」

「だが石動の頭には妙に引つかかっていた。」

「とりあえず自分の中ではアサシンがまだ生き残っていると仮定しておこうと決めたところで、部屋のドアが開く。」

「ああ、桜ちゃんか。どうしたんだい？こんな時間に。」

「空いたドアから表れたのは、間桐桜。」

「紫色の髪をした幼女であるが、目にハイライトが点っていない。遠坂の家からの養子であり、間桐の魔術に染めるため蟲蔵に入れられた影響である。」

「雁夜が聖杯戦争に飛び入り参加した理由のひとつにもなっていることから、かなり悲惨な境遇であることは伺えた。」

「雁夜おじさん、その人、だあれ？」

「ん、俺かい？可愛いお嬢ちゃん。俺は石動惣一っていうんだ。雁夜とは仕事でできた友人だね。冬木市で仕事をするから、しばらくここに世話になることになってるんだ。挨拶が遅れてすまなかったな。」

「咄嗟に嘘で誤魔化し、バツが悪そうに謝りながらも友好的な視線を崩さぬ石動の態度に少し安心したのか、石動達のいるテーブルへと近づく。」

「この紙はなあに？」

「おっと、桜ちゃん。これは仕事に使う大事な書類なんだ。だから見ちゃダメだぜ？」

「……………うん。わかった。」

「そうか！素直で良い子じゃアないか。おっと、もうこんな時間か。良い子はちゃんと寝なきやダメだぜ？夜更かしはレディの敵だぜ？」

「うん。じゃあおやすみ、雁夜おじさん。石動おじさん。」

「うん。おやすみ。桜ちゃん。」

「おやすみ。……………あと、俺はおじさんって歳じゃねえぞ?」

寝室へと向かった桜を見送った2人は、書類を見ながら情報の精査を続ける。

「……………なあ、マスター。これからどうするつもりだ?」

だが沈黙は苦手なのか、手は休ませずに質問をする。

聞かれた雁夜は、少し悩むような素振りを見せ、しばらく考えた後に、答えをだす。

「……………しばらくは様子見かな。他陣営がどう動くかもわからないし。それに、まだ体調だつて万全じゃないしな。」

雁夜自身は戦わないとは言え、いざと言う時に蟲が使役出来なければ呆気なく殺られてしまうだろう。

そうならないようにも、極力最高のコンディションにしておくべきなのだ。

「そうか。じゃ、俺もちよつとぼつかし仕込みをしとくかねえ。」

「仕込みつてなんだよ?」

「そいつは言えねえなあ。ま、楽しみにしとけて。」

「なんだよ。教えてくれたつていいだろ?」

だが、石動は笑ったまま書類を見るだけで答えない。

不満そうに作業に戻ろうとした雁夜の脳内に、直接声が届いた。

(そう不満そうにするなつて。声に出したら臓硯に聞こえちゃうだろ?それは良くないのはお前が一番よく分かってるはずだ。)

(臓硯に聞こえちゃうまずいつて……………お前まさか!?)

(ああ、その通りだ。俺は臓硯を殺すつもりだ。)

目に義憤の光を浮かべ、憤るように念話で言う石動。

心做しか念話の声にも力が籠っているように感じられた。

(俺は……………桜に対して虫けらを使って人体実験をする臓硯を許せない。)

石動は今桜が置かれた現状を知っている。

だからこそ、ハッキリと宣言した。

(俺が見た正義のヒーローなら、絶対に見逃さないはずだ。『アイツ



ら』がない今、俺がやるしかない。」

アイツら、というのが誰を指すのかはわからないが、雁夜にもその熱い思いは十分に伝わっていた。

(俺にもなにか手伝えることは無いか?)

(とりあえずは絶対に口に出さないようにしてくれ。どこから情報が漏れるか分かったもんじゃねえからな。)

思わず聞く雁夜に釘を刺し、席を立つ石動。

不服そうにする雁夜を宥めつつドアへと近づき、半身を滑り込ませ退出する。

「じゃ、しばらくはそういうことで頼むぜ、マスター。Ciao」

退出際にはなった挨拶はこの上なく軽く、さっきまで話していた重い話が嘘のように感じられた。

そう思った雁夜は、思ってた以上に自分が緊張していることに気づいた。そんな自分に苦笑を漏らしつつ、背を伸ばす。

パキパキという背骨に時間の流れを感じ、ぼんやりと頭を休めていると、机の上で握られた自分の手の甲に光る令呪が目に入った。

(……例えば、まだ全然時間が経ってないんだよな。)

手を握ったり開いたりする動作にも問題はなく、自分のしてきた厳しい生活がとうの昔に感じられるが、実はまだそんなに時間は経っていない。その驚異的な回復力はマスター故の特権だったりするのだろうか。

そんな役体の無いことを考えてはみたものの、現状は変わらない。

(もう始まつてるんだよな。聖杯戦争は。)

そう。現状の、「聖杯戦争に勝利し、桜を助ける」という目標は何も変わっていないのだ。

握られた拳に更に力が入る。

(でも、前の俺とは違うんだ。)

手に光る令呪、そしてサーヴァントと繋がるパスこそがその証拠だった。

(俺は絶対に、桜ちゃんを救ってみせる!)

再び決意を新たにし、顔をあげる。

その決意は闇夜に溶け、月明かりだけがそれを吸い込んだ。

# 集いし5人のServant

side 雁屋

冬木市外れにある倉庫街。

港としての機能も持ち普段は船が行きかい、仕事をする人の多いこの場所では今、普通に生きていれば聞くことのない音が鳴っていた。

それは金属同士がぶつかり、火花を散らす音。つまるところ、「剣戟」と呼ばれるものだ。

場所はおろか時代すら間違えていそうな行為。

その行為を行っているのは、風に包まれた得物を振るう金髪碧眼の美少女「セイバー」と、二本の槍を巧みに扱って得物をいなす黒子が特徴の「ランサー」。

2人は聖杯戦争の参加者であり、この戦争において初めて剣を交えた存在であった。

「……………すげー」

少し離れたコンテナの裏からその戦いを見ている雁屋の口からは、感嘆の呟きが漏れていた。

苛烈、されど美麗。一切の隙を見せず、小細工無しに真正面から武器をぶつけ合う。そこにいるのは、己の武勇を信じる戦士。

目の前で繰り広げられている戦いは正に騎士道精神を具現化させたようなものであった。

だが、それと同時に畏怖する。

今からこんなやつと戦わねばならないのか、と。

そんな心配を胸に横を見やる。

横にいる石動はいつもと変わらぬ様子で戦いを観察しているようで、時折「ほほお」とか「うーむ」とか唸っている。それを見るとさっきまで畏怖していた自分が馬鹿らしく思えてくるのは、石動の人格がなすゆえだろう。

そうやって戦いに魅入り、暗闇目が慣れ始めていた時だった。

上空から眩い雷鳴と共に戦車が降りてきたのだ。

このタイミングにこの現象、なによりもそれが持つ圧倒的なまでの魔力量。間違いようがなかった。

「あれは……………新しいサーヴァントか!？」

sideエボルト

「我が名は征服王イスカンドル。此度の聖杯戦争においては、ライダーのクラスを得て現界した。」

「何を考えてやがりますか!この馬鹿はあああああ!」

突如として現れ、本来秘匿すべき真名を独断で堂々と晒しあげたライダー、「イスカンドル」。

横で騒ぐマスターをデコピンで沈め、先に戦っていた2人へ問うた。「聖杯を譲る気は無いか」と。

当然のように却下する2人へ更に交渉を持ちかけるも、一蹴されていた。

ちなみに復活して早々ぽかぽかと胸を殴るマスターはガン無視されていた。不憫だねえ。

そんなマスターへと、拡声魔術によって声がかけられていた。

内容を整理すると、どうやらそのライダーのマスター、「ウェイバー・ベルベット」は講師である「ケイネス・エルメロイ・アーチボルト」の聖遺物をパクリ、それを使って聖杯戦争に参加したらしい。それに憤慨したケイネスは魔術師として課外授業をしてやるのか言っていたが、当の召喚されたイスカンドルからすっぱりと拒絶されていた。なんでも、姿を隠しているような輩は自分とは不釣り合いなんだと。相変わらず王つてのは何考え始めるかわかったもんじゃないねえ。

俺が自分の兄であり、ブラッド族の王であった「キルバス」のこと

を思い出していると、突如イスカンドルが大声を出した。

「おいこら！他にもおるであろうが。闇に紛れて覗き見をしておる連中は！」

「……………まずいな。」

ここで姿を見せなければ、恐らくイスカンドルからの印象は非常に悪くなる。俺は別段構わないのだが、ハナっから敵対心を植え付けておくようなことはしたくない。基本的に好印象な方が利用もしやすいしな。

「バーサーカー。」

声をかけられてそちらを向くと、マスターが覚悟を決めた顔をしていた。

「行つてこい。だが、あんまり無茶はしないでくれよ？」

俺を完全に信頼した目で、出陣を促してきた。まだ一緒に過ごす月日だってそう長くはなかったのにねエ。

……………これだから人間つてのは面白い。

そう考えた俺は懐からトランスチームガンとコブラロストボトルを取り出す。

「了解だ。マスター。じゃ、ちよつくら行くとしますかねえ！」

『コブラ！』

「蒸血！」

『ミストマッチ!!コブラ……………コツコブラ……………ファイヤー!!!』

煙が俺を包み、姿を変えていく。

煙が晴れた時にそこに居たのは、真紅の蛇だった。

毒々しい紅に蛇の意匠を持ったこの姿——ブラッドスタークになった俺は小さく笑い、肩を回す。

「さ、初出陣と行きますかア！」

ちよつくら気合いを入れ直し、まずはコンテナから姿を表すことにした。胸が踊るねえ！

第三者 side

「どうも御三方、Bonjour!さつきまでは覗き見なんて真似し

「て悪かったな。」

暗闇から姿を表したのは、紅い蛇、ブラッドスターク。

スタークはセイバー達の目の前まで歩くとバイザーの縁を撫で、恭しく礼をする。

「あんまりにも2人の戦いっぷりが綺麗だよ。思わず見とれちゃってたんだ。だから許してくんねえかな？」

なあ頼むよ、と人懐っこい笑み（仮面で見えないが）を浮かべるスタークに対して向けられる視線は懐疑的なものが混じっていた。

だが、出てくるよう呼びかけた本人は快活に笑っていた。

「うむ。覗き見は褒められた物ではないが、こうして出てくるその心意気や良し！お主もまた聖杯に導かれし英霊だということであろうな。ところで問うておくが、お主は余に聖杯を譲る気は——」

「悪いが俺にもマスターがいるんでね。そいつアできない相談だ。すまねえな。」

「うーむ、そうか……。残念だなあ。」

心底残念そうにするイスカンドル。

横にいるウエイバーは、もう突っ込まないぞと言わんばかりに座り込んでいた。

「つと、そっぴや自己紹介がまだだったな。俺の名はブラッドスターク。バーサーカーのサーヴァントだ。以後、お見知りおきを、つてね。」

そしてその自己紹介に、場の全員が驚愕した。

イスカンドルに続き、自らの真名を晒したのだ。

しかも、クラスがバーサーカー。

その理性的な振る舞いから、残りの枠のキャスターかアーチャーだと考えていた一同の度肝を完全に抜いた形になった。

「待て……。お前が、バーサーカーだと!？」

ランサーが動揺し問いを投げるが、サムズアップでにこやかに返される。しばらく何かを言おうと口をパクパクしていたようだが、諦めてしまったようだ。

「待て、バーサーカー。貴公のその振る舞い、狂化がかかっていないの

か？」

「いや、かかってはいるんだがどうも弱くてな。おかげでステータスも中途半端にしか上がってねえ。とんだ災難だぜ。」

後を次ぐ形でセイバーがした質問にも、肩を竦めておどけるながら答える様子に、「情報を与えてしまった」というような焦りは無い。それどころかそれでも構わないと言ったような態度からは、その真意は読み取れなかった。

だが、自分と同じように自ら名乗りを上げたものがいた事に気分を良くしたのか、イスカンドルは更に叫ぶ。

「うむ。お主の気概やよし！しかし全く情けない。情けないのう！セイバーランサーの剣戟を覗き見し、余とバーサーカーの名乗りを聞いてなお姿を表さぬ小物がいるとは。それでも冬木に集った英霊豪傑か！とんだ腰抜けもいたもんだわい。」

「全くだよなあ！英霊サマが聞いて呆れるぜ！」

そしてスタークが便乗し、煽り立てる。

それに益々機嫌を良くしたイスカンドルは声を張り上げ、高らかに叫ぶ。

「聖杯に招かれし英霊は、今！ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンドルの侮蔑を免れぬものと知れ！」

そして訪れる静寂。普通の思考回路なら、これ以上絶対にサーヴァントは表れない。そう考えるのが普通のこの状況。

だが、その静寂は一瞬で無へと帰った。

「我を差し置いて王を名乗る不埒者が一夜のうちに2匹も涌くとはな」

静寂を破ったのは1人のサーヴァントだった。

そのサーヴァントは黄金の甲冑を身に纏い、虚空から出現した。輝く甲冑は闇夜にあつてなお煌めき、闇によってより映えていた。

紅く燃える双眸は侮蔑の色に染まっており、眼下の石動達を見下ろしていた。

彼の真名は「ギルガメッシュ」。

世界でも名を知らぬ人は居ないと言っているほどに有名であり、その武勇は数々の物語にも影響を与えている。最も、今この場にいる者は誰もその真名を知らないのだが。

「難癖つけられてもなあ……。イスカンドルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならんのだが。」

「たわけ。真の王たる英雄は天上天下に我ただ独り。あとは有象無象に過ぎんわ。」

まさに唯我独尊。

自分以外のすべては有象無象だと言い切るその態度は尊大であり、ある意味最も王らしいと言えた。

だがそんな態度は寛容に流したのか、イスカンドルは特に気にした風もなく問いを投げた。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りをあげたらどうだ？ 貴様も王ならば、まさか自分の真名を言えんとはいうまい。」

「問いを投げるか。たかが雑種風情が。」

だが軽く流したイスカンドルとは違い、は激情を露わにする。

理屈を抜きにした感情的な癩癩は理屈を抜きにした威圧感があり、放たれる殺意は他を圧倒していた。

そして殺意に当てられ、両者間の間に不思議な拮抗が生まれる。

正に一触即発。

極度の緊張状態にあつてなお、余裕を崩さないスタークは少し不機嫌そうに話しかける。

「オイオイ、お前は人を見下さねえと話もできねえのか？ これだから王様つてのはタチが悪いんだ。」

真つ直ぐに上空のサーヴァントを見つめるバイザーは一切の光を灯さず、黄金の甲冑とは対照的だった。

「……………ほう。貴様、何者だ？」

黄金のサーヴァントは目から侮蔑の色を消し、訝しげ、そして大いに好奇心を含んだな目線を当てる。

「なんだその匂いは。悪性、とも違うか。それに見通せぬ。貴様は本当に『こちら側』の存在か？」



鋭い目付きで睨む。悪性、見通せない、『こちら側』。

色々ど気になる単語を零す黄金のサーヴァント。

対するスタークは肩を竦め、僅かに低くなった声で話す。

「……………さてな。わざわざ自分のことをべらべらと喋る気はないな。それに、今の俺はただのバーサーカーだ。それ以上でもそれ以下でもない。」

トントンと肩をスチームブレードで叩きながら返すスターク。その様子は飄々としており、余裕ぶつた態度は崩れない。

「狂犬風情が私の問いに答えぬか。その不敬、万死に値する！」

だが逆にギルガメッシュは激昂。

つい先日遠坂邸で見せた黄金の波紋から武器を覗かせ、スタークへと照準を定めた。

それを見たスタークは肩を竦め、手を上げてため息をつく。

「はあ……………。なんでこう王様つてのは自分勝手なんだろうなあ。俺の兄も王だったが、自分勝手過ぎて手に負えなかったんだよなあ。」

余裕ぶつたその態度が逆鱗に触れ、顔を憤怒の表情に染め上げるギルガメッシュ。

「いいだろう……………！貴様のその余裕ぶつた態度、どこまで続くか見せてみよ！」

そういうが否か、波紋から無数の武器が射出される。

剣、槍、槌、斧、薙刀、刀。

その種類は一定ではなく、時代も出自もバラバラの物だった。だが、共通しているのはそれが全て宝具であること。そしてそれが全てスタークを狙っているということだけだった。

(あれは食らったらまずい！避ける！石動！)

スタークの脳内には、雁夜からの警告の念話が届く。

それに反応する隙も与えまとしたのか、一斉に飛んでくる武器の群れ。

その煌めきは流星のように華麗でありながら一発一発が即死級。当たれば一溜りもないことが容易に想像出来た。

そして、一番槍で飛んできた槍がスタークに当たる寸前に、スター

クがトランスチームガンにフルボトルを刺した。

『ロケット！スチームアタック！』

音声が流れでて、銃口が光る。

飛び出したエネルギー弾は不思議な軌道を描き、数本の武器に着弾。大爆発を起こして全ての武器を爆風が飲み込み、軌道をズラした。

「ほう。少しはやるようだな。では、その小癩な手癖で何処まで生き延びられるか、見せてみるがいい！」

それに怒ったギルガメッシュは更に黄金の波紋を展開。100に達するのではないかと思われるほど多くの波紋から飛び出した武器は更に厚い弾幕となり、死を運ぶ。

「これはちよつと不味いかア」

そうつぶやくと、紅いオーラを纏い始める。

そして着弾する瞬間に瞬間移動と見間違うほどの速度で動き、その全てを避ける。それどころか飛んできた武器の数本をキャッチし、それを振るって武器を叩き落とすなんていう芸当までやってのけた。

「中々やるではないか狂犬。」

見ているセイバー達の口から思わずため息の出る程華麗な立ち回りはギルガメッシュの口角を少し上げること成功していた。

そして次に現れた黄金の波紋は先程の数を遥かに超え、先端を覗かせる武具の輝きはより一層増していた。

当たれば霊基どころか座の情報すら吹き飛びそうな威圧感を放つそれらに、思わず身構えるスターク。

しかし、それが発射されることは無かった。

「…………お前如きの忠言で我が引くとしても思っているのか？時臣よ。」

ギルガメッシュの脳内に届いたのは、マスターである遠坂時臣の言葉。「この場はどうか撤退して欲しい」という内容の忠言だった。普段なら激昂し、令呪でも使わない限り絶対に引くことは無かっただろう。だが、今回は違った。

「フン。まあ良からう。今の我は機嫌がいいのでな。おい雑種共、次に我と見える時までには有象無象を間引いておけ。我と矛を交えるの

は一級の英霊のみで充分だ。それと、スタークとやら。我に武器を向けたこと、ゆめ忘れるでないぞ。」

そう言い残し、黄金の粒子となってその場を去っていった。

「全く。急に現れて掻き乱すだけ掻き乱してどっか行きおったか。まあ、マスターの度量は小さかったようだし、仕方あるまいか。」

一気に空気の重圧感が消え去り、肩から特大の鉛が消え去ったような錯覚を覚えていると、イスカンドルがごちる様に呟いた。

「で、今夜はどうする。余はこのまま矛を交えても良いが……？」

ニヤリと笑うイスカンドル。しかし、他の陣営はそうでもなかったようだ。

「…………今夜のところは止めておきましょう。」

「そうだな。我々も一旦体制を建て直したいと思っていた所だ。」

そういうが否や一礼をし、去っていくランサー——真名を、デイルムツド・オディナ。

後を追うように一礼をし、アイリスフィールを伴って去るセイバー——真名を、アルトリア・ペンドラゴン。

その場に残されたのは、頭をぼりぼりと頭をかくイスカンドルと、スタークのみだった。

「俺も帰らせてもらおうかね。流石に今の状況じゃイスカンドル大王を倒すのは厳しそうだ。チャオ！」

だが、残り一基まで煙と共にその場を去ってしまった以上、イスカンドルは矛を交える相手がない。

「はあく。ま、今夜のところはしようがない、か。おい坊主！帰宅するぞ！」

そういう訳で、イスカンドルもチャリオットに乗り込み、居候しているマツケンジー宅へと帰還して行った。

あとに残ったのは派手にぶっ壊されたコンテナと布団のようにひっぺがされたアスファルト。そして戦いの余波の残る熱を帯びた

風だけだった。